

まぼろしの「末吉大池」

「池の下 商店街」は何故『池の下』
なのか 小宮 精一

はじめに

末吉小学校同期生の正法地浩之君から一枚の写真（キャビネ判）を見せられてからもう一年以上たってしまった。正法地君の父上、龍市氏がとったもので、他に古い三ツ池の写真も二枚あった。三ツ池の写真の一枚には、戦前よく見かけたマントのようなトンビ姿の正法地君のおじいさんが写っている。

龍市氏は広島県安芸津の写真館に勤めておられたが、住居は下末吉の消防署のはす向かい、森永の前にあって家族はこちらで生活していたのである。いわば二重生活をおくっておられたようである。

その写真を見て私は直感的に、これは「まぼ



ろしの大池」ではないかと思った。いまは『池の下』という名前だけが残っている、その大池である。遠い遙かなむかし、大きな水溜まりのような池を見たような見ないような、かすかな記憶がよみがえる思いであった。

私は昭和8年3月生れ、今年の三月で遂に七十四歳になった。四、五歳まで佃野に住んでいて（いまの大寿司のすぐ下、松尾建設のところ）、父は「洋服裁縫師」の看板を掲げ、数人の職人が家で働いていた。私が肺炎になったとき大池の鯉の生き血を飲まされた、と親から聞いている。昭和十一年頃



にはまだ池はあったのである。我が家から池までは子供

分とはかからない。行っていない筈はないのだが、池の記憶はほとんどない。時代をわかっていただく意味で当時の写真をのせておく。家の前で職人さんと一緒に私が写っている。つまりその頃の、これは七十年前の話なのである。

●池の下通りのみすず屋主人、宮入昭氏（下末吉11611、昭和2年生れ）に写真を見ていただいたところ「多分『大池』に間違いないと思うがどの地点からとったかまではわからない。大池だとすると、池に突き出ている家屋は『小池』宅ではないか」というお話であった。宮入氏は我々と同期の宮入（現姓 高橋）正子さんの兄上である。正子さんは「池のほとりに貝殻がいっぱいあった」ということ以外、ほとんど記憶がないようであった。

ところが小さいころ池のすぐ傍に住んでいたという同期の川島 協君に見せたところ、「小池（我々より一学年下）はよく知っている、な

ぐって泣かせて親父さんに追いかけられたこともあるが、ここに写っている家は小池の家とは思えない。この写真が旧朝日湯側からとったものだとすると当然写るべき山の姿が入っていない。愛宕神社に連なる台地が入っていないから、これは「大池ではない」と断固として却下されてしまった。

やはり「大池」なのではないか

しかし大池ではないとすると、どここの池なのだろうと私は考えこんでしまった。むろん三ツ池ではない。三ツ池は知り過ぎるほど知っている。正法地君のおじいさんが写っている当時の三ツ池の写真を見ても、山の姿や池のたたずまいがまったく違う。それでは二ツ池はどうか。だが小学生の頃、遠足が何かで行ったときの記憶では周囲は鬱蒼と樹木が繁っていて、山奥の幽邃な池という印象が残っている。ほとんど行ったことはないが、寺谷大池（↓現弁天池）は

どうか。しかし明治のころの古い写真では池の縁まで山が迫り、ワラブキ屋根の家々が点々と見える。何よりも雰囲気はやはりまるで違う。大きな水溜まりのようにひらけたこの写真の池は、やはり末吉大池以外には考えられない。思いあまって私は土地の旧家の主である横山嘉守氏（下末吉6125140）に写真を見ていただいた。

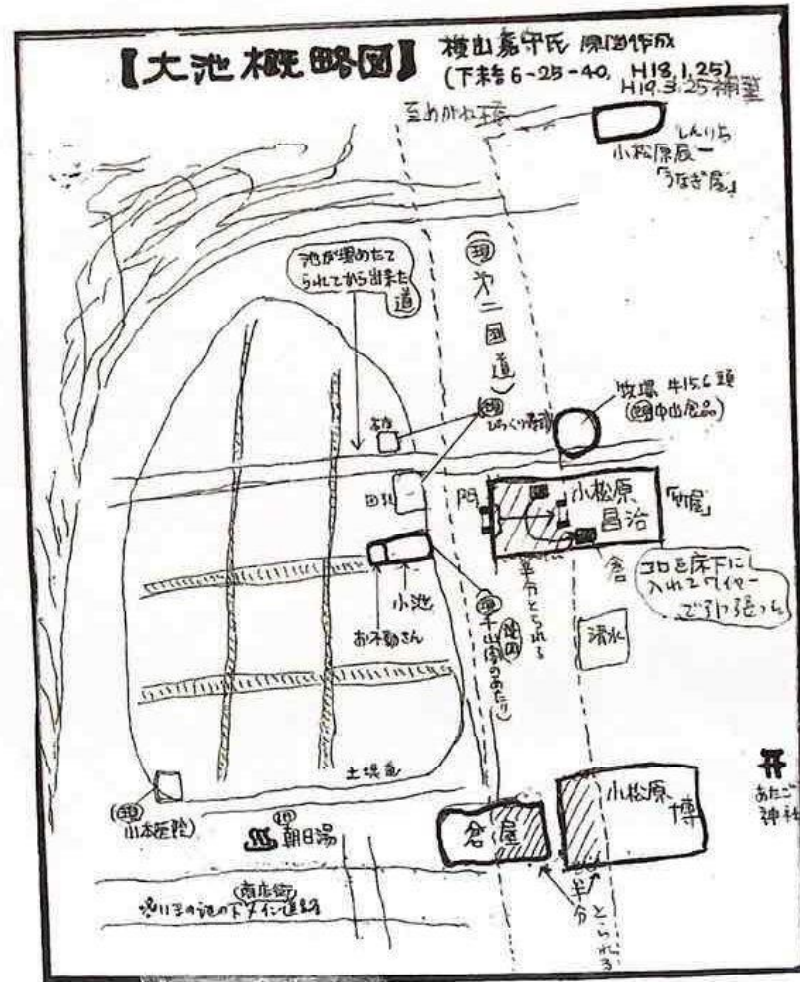
横山嘉守氏のお話とスケッチ

（平成18年1月25日）

我々より数学年先輩の末吉小卒業生である横山氏は、ほとんど何の疑いもなく末吉大池であると信じられた様子で、次ページの図のようなスケッチを描いてくださった。

「池の中には板を張った木道が縦、横に走っていて、木道の上で釣りをしている人達がいた。写真にはたしかに木道のようなものが写っている。」

小池さん宅は池に突き出っていて、家の先端部



にお不動さんを祀ってある小さな社のような建物があった。」

「池では鯉だけではなくウナギもとれて、通称『うなぎや』と呼ばれる小松原辰一（しんいち）氏は大池でとったウナギを生麦方面に卸していた。いまもウナギとりの道具や生け簀（いけす）が残っている筈である。

いまの中山食品のところには牧場があって、牛が十五、六頭いた。

小松原昌治氏は二国が出来るさいに門と倉を移動した。いまの門は当時のままのものである。」

●その後たまたま同期会会長の『池の下』商店街中央の藤田理容店主、藤田政司君に近所の鈴木利雄氏（下巻 11-11-12）を紹介してもらったことができた。藤田君も「大池」の記憶がまったくないということである。鈴木氏はむかしの大池の土手道の下、旧朝日湯裏に生まれたときから住んでいる、とのことであった。大正十

四年一月生れ。元町内会長をなされたそうである。

鈴木利雄氏のお話

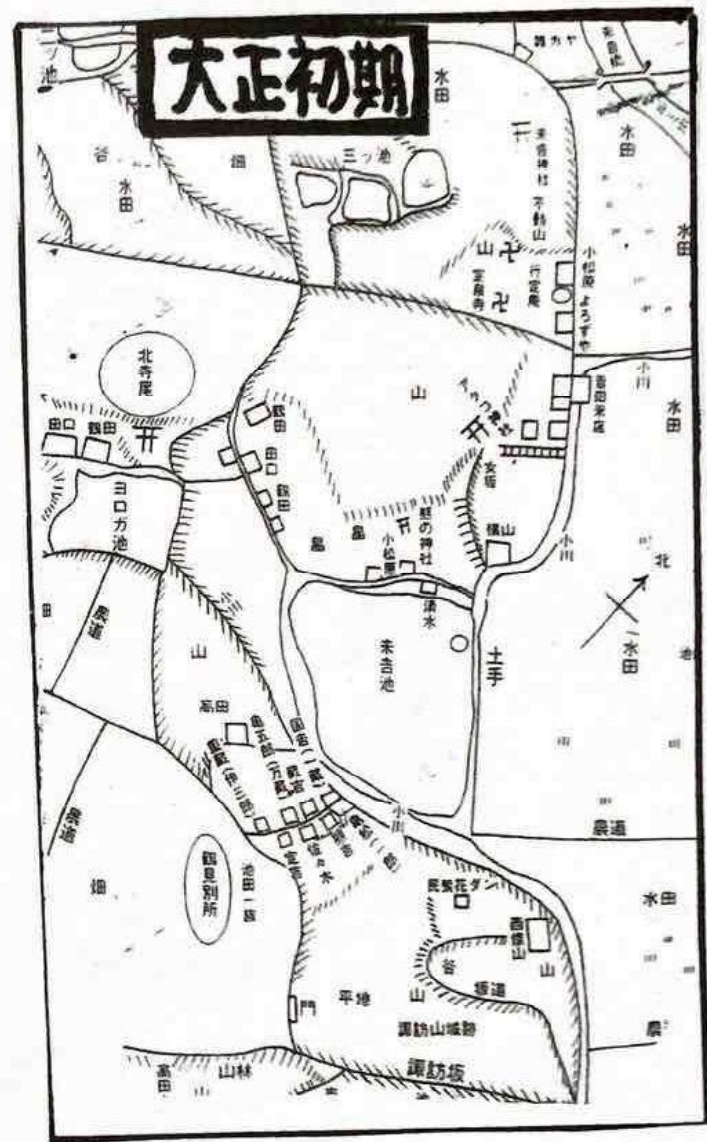
（平成18年2月27日）

「大池のことを古い人は『番田の池』と言っていた。

写真には鉄条網が写っている。これは決め手になるもので、大池に間違いない。自分は手を引っかけケガをした」と右腕を見せてくれた。「浮き草も写っている。池には櫓で漕ぐ舟が一所あって、浮き草を掃除していた。写真には浮き草が見えるから、春に写したものだろう」

「池の中には幅1メートル位の栈橋があり、釣り人が大きな鯉を釣っていた。ウナギもいた。いまの山本医院のところに池に突き出したスレート屋根の平屋があり、八鈴木寓（や）という表札がかかっていた。釣り人はここで入漁料を払って池に入った」

「いまの中山肉店のところは牧場で、牛が十五、



六頭いた。我が家の前の土手道は県道だったよ
うで、いまの池の下商店街のメイン道路は当初
はなくてあとから出来たものである。土手道に
は桜の木が両側に植わっていて花ときはそれは
見事だった。桜の木の下で妹をとった写真が一
枚あるが、池は写っていない」

「土手道からは『おらがビル』、レンガ工場、
横浜方面まで見渡せた。なにしろ低地で平屋ば
かりなので遠くまで見通せた。」

昭和12年ころ国道をつくるために山をくずし
て先ず池の半分を埋め立てた。そのときに、い
まのビックリ寿司の旧本店と回転寿司店の間を
通る道路が出来た。我が家は土手道より3メー
トル位下にあったが国道が出来てから土手道は
国道に合わせて1メートルほど削られた」

※飯島光壽氏

(平成18年12月7日)

八百光主人、昭和10年2月生れ。
「むかしは我が家の前の道路はなかった、と聞

いている。関東大震災後に出来たようで、はじ
めは『新道』(しんみち)と言ったそうだ」

●その後、我々と同期の吉村絢子さん(現姓
由井)が大池の南西端上部に住んでいた(も
う池は埋め立てられていたが)との噂を聞き、
さっそく電話してみたところ、吉村さんの家の
隣にむかし『池の番』と呼ばれていた「矢野さ
ん」という方がいて、いまも住んでおられる筈
というお話を聞いた。

矢野氏は昭和3年生れ、宮入氏、新倉恒雄氏
(倉屋酒店主人)と小学校同期とのこと。物心
ついた頃からいまのところに住んでおられるそ
うである。下末吉1119120。

余談になるが、末吉小では5年生のときの担
任は呉地先生、6年は江藤先生。陸軍士官学校
と予科練に合格したが、一日も早く飛行機に乗
りたくて予科練に行くことにした。予科練に行
く直前、秦野に集団疎開していた弟に上秦野ま
で会いに行ったとのこと。

矢野隆司（たかし）氏のお話

（平成18年12月17日）

（平成19年3月24日）

「あや子（吉村絢子）ちゃんの家はつい近年まであってお母さんが住んでおられた」「我が家の裏には小川があって大池に流れこんでいた。池の真中には木の板をつないだ仕切りがあり、半分ずつに分かれていた。旧朝日湯側の半分は釣堀になっていて鯉などが釣れ、もう一方の池にはクチボソなどがいた。釣り人は板の上で釣りをしていた。池の中には山菜が浮いていた。いまの山本医院のところが『釣り口』で、『池の番』と言われる鈴木という家があり入漁料をとっていた」

「いまのビックリ寿司（回転）横を通して中山食品の方にゆく道は、子供の頃からあった。道の上の方（めがね橋寄り）は空き地になっていた。」

『釣り口』（現山本医院）から矢野宅の前を通

り二国へ出る道は、草っ原の道だった」

「下方の土手道の両側には桜が植わっていて花どきは見事だった。いまの佐々木病院前の道が土手道にぶつかるあたり、水が流れていて、ハマグリなどの貝がらが層を成して埋まっていた。倉屋の傍にはピワ畑があり、柵の中に入りこんでピワを失敬したりした。」

小松原昌治氏宅の門は二国の池側にあり、いまの二国は小松原家の庭だった。現在の門は当時の門をそのまま移築したものである」

「放置してあった埋め立て作業用のトロロッコに乗って、仮橋だったいまの新鶴見橋をこわこわと渡ったこともあった。近くにレンガ工場があって女工さん達が働いているのが見えた」

「小池」宅について

宮入氏から、池に突き出て写っているのは小池さん宅ではないかという示唆を受けていたの

方々からお話を伺うことができた。

（吉村絢子さん）

「私達より一級下の小池敏久君のお宅ではないかと思う。小池さん宅は洋館だった。池がこわされてから、何回か家を動かした。私は池が埋め立てられてから越して来たので池の記憶はないが、小池さん宅は国道に面していて、国道より3メートルほど低いところにあった」

（矢野隆司氏）

「小池さん宅はいまの千山閣（焼肉店）のところにあった。かなり長い期間、洋館だった」

（松井 豊氏）我々より一級下の学年。

「私はいまのライフの傍に住んでいて小池君とは同級生だった。小学校2、3年のころ、学校の帰りに何回かお邪魔したことがあった。洋館風の建物で塀か建物の色かはっきり覚えていないが、全体が緑色だったという印象が残っている。仏壇のお供物を頂戴した。現在、小池君の所在はわからない」

（飯島光春氏）

「小池さん宅はいまの千山閣のところにあって、幼稚園のころ母に連れられて訪ねたことがある。お父さんは市役所に勤めているえらい人だと聞いた。池はすでに埋め立てられていたが、庭先が湿地で葦がはえていたのを覚えていた。国道はすでに出来ていて、家は国道より2、3メートル下にあった」

（新倉恒雄氏）

「小池さん宅は何回か家を動している」



●いずれにしても、家は池の中に突き出していたこと、緑色の洋館だったこと、池が埋め立てられた前後に家を動かしたこと、また千山閣のあたりにあったことなどは確かのようなのである。

●末吉国民学校（当時）の卒業生台帳によると、



吉村さん宅の当時の地番は222番地、一級下の小池敏久君宅の地番は222番地である。
吉村さん宅に隣接していた矢野氏宅も221番地と伺っている。鈴木利雄氏宅は968番地であった。

●昭和5年の地図によると大池全体が222番地であり、小池さん宅も222番地ということになる。小池宅はまさに池の中にあったことになる。駄洒落ではないが、小池は大池のなかにあったのである。

●この後、決定的とも思われる証言を矢野氏からいただいたので追加する。

矢野隆司氏

（平成19年3月19日）

「私は池が埋められている途中で兵隊に行った。終戦になり軍隊から戻ってきたが、小池さんのお宅はそのままあった。

私のところは小池さん宅とは懇意にしていなくて、あるとき小池さんのおばあちゃんと私のおじいさんとを連れて、成田さんにお参りに行ったこ

とがある。私はハイヤーをやっていたので、自家用車を小池さんの玄関前につけておばあちゃんを乗せた。小池さん宅は、すでに出来ていた国道より2、3メートル低くなっていた。階段を下りて家に入るようになっていた」

「写真の家が小池さんの家であることは、間違いない。緑色の洋館だった。小池さん宅に接して前の方に、お稲荷さん（？）が祀ってある建物があった」

「池を埋める際に確かに家を動かしたが、家はそっくりそのまま、床下にコクを入れてワイヤーで引っ張った。だから動かしたのは僅かな距離であって、前の場所とそれほど離れていない。動かす前の庭にはパショウの木があり、小さなバナナのようなものが成っていた。そこでトンボとりなどをして遊んだ」

どの地点でどの方向に向かって撮影

されたのか

まさにこれが難問であった。私には何となく『釣り口』である現山本医院のあたりから愛宕神社に続く山側に向けて撮影した筈という思い込みがあった。低地の佃野の方から写真をとりにきたら、自然にそういうことになるだろう、と。しかしそうになると、何人かの人から指摘があった「山が写っていない」という点の説明がやはりつかないのである。

私は、そうではなくて、もっと上部の西の方、めがね橋を背にした地点から逆に土手道、低地方面に向けてとったのではないかと考え直してみた。

結局、このことについては、次のような意見が出された。

矢野隆司氏

（平成18年12月17日）

「矢野宅にかなり近い場所から下方東側の土手道の方向に向けてとったものと思う。こちらから見ると土手の向こうは低地で何もなく、前にも言ったように『おらがビル』（カスケード

「レンガ工場、横浜方面まで一望だった。小松原昌治宅から横山宅までの、愛宕神社に連なる山が写っていないのは当然だと思う」

鈴木利雄氏 (再、平成19年2月27日)
(同年3月20日)

「最初はこちらの土手側からとったものと思っただが、あとでよく考えてみると向こう側、いまのビックリ寿司の横の道かそれよりさらに上の方からめがね橋方向に向けてとったのではないかと、と思うようになった。向こう側は平坦なので、山は入らない」

矢野隆司氏 (再、平成19年3月24日)

「ビックリ寿司付近からめがね橋方向に向けてとったとすると、写真に写っている小池宅は入ってこない。まためがね橋のところは山続きになっていて(はじめに上部に橋をつくって、それから下の方をくりぬいていった)し、そうすると写真に山が入ってこないわけがない」

横山黒雪氏 (平成19年3月25日)

「私はビックリ寿司の横の道から、下方の土手道の方に向けてとったものと思う」

●いずれにしても、当初、私が考えた現山本区院近辺、あるいは旧朝日湯のあたりから上方に向かって写したものであるという先入観が間違っていることは確かである。

以下である。

どうやら写真は、まぼろしの「大池」に間違いないようである。

この間、何人かの人の口から「池がこわされた」という言葉を聞いた。それが偽らざる実感だったのだろう。

もうひとつ。結局、大池の写真は他に一枚も出てこなかった。鈴木氏も桜の木の下で妹さんが写っている(池は写っていない)写真が一枚、新倉氏も国道に半分削られる前のむかしの大きな家の写真が一枚あるだけのようであった。当



時はリメタはなかなかの贅品だったのである。旧家の横山氏の父上はさすがにかなり写真をとっており多数の乾板を所蔵されていたそうであるが、戦災でそれも全部焼けてしまったとのことである。

もう、むかしここに素朴な大きな池があったということを実験として鮮明に記憶にとどめている人達は、ほんの一握りになってしまったようである。それにしても『池の下』の地名だけに名残りをとどめている1万2000平方メートルもの本物の「大池」がいまもこの地に残っていたら、下末吉や佃野や近隣の人々にどんなに憩いやうをおいを与えたことだろうと思うといささか感慨深いものがある。

【参照】

※「大正初期の鶴見」

天王院幼稚園生万通信 吉田幸輔氏作

昭和62年7月